

キャリア教育の視点に立った学校・授業づくりの推進

中村 佳明

(京都市立七条第三小学校)

はじめに

本校が「キャリア教育の視点に立った学校づくり・授業づくり」を始めて3年目となる。新学習指導要領にも、ようやくキャリア教育の重要性が明確に示されたものの、依然として馴染みのあるものとは言い難い。本校では、一貫して「なりたい自分」をキーワードに据え、学校で学ぶことすべてに意味があり、むだなことは一つもない、あらゆることを「自分ごと」としてとらえ、進んで社会や他者とつながろうとする「主体性」が発揮できるようにすることをめざしている。

「なりたい自分」——未来の主演、担い手である子どもたちが、社会参画・社会貢献を通して自己実現を図る姿をイメージし、わたしたちはそう呼んでいる。「なりたい自分」に向かう小学校段階は、できることにすすんで取り組んだり、目標に向かってすすんで挑戦したり、人の役に立つことをすすんで行ったりして、自己効力感や自己有用感を積み重ね、自身のキャリアの基盤形成を行う時期である。校是である「大胆に改革し、頑固に守る」の上に立ち、従前にとらわれない柔軟な発想で、教職員一同研鑽を積みながら教育活動を展開している。

本校と校区の概要

本校は、昭和12(1937)年1月8日に、七条尋常高等小学校より分離し、「七条第三尋常小学校」として独立開校した。開校当時は、木造2階建て12教室、児童は1年から4年までの518名であった。地域の力強い支えを受け、歩みを続けてきた本校は、本年、創立83周年を迎えた。

学区の大半は、五条通、西大路通、七条通、七本松通の幹線道路に囲まれた範囲に存在しており、平成27年度の国勢調査においても、下京区で最大の学区となっている。

周辺地域は、平安京の昔から豊かな歴史・文化・伝統を有し、幹線通りに商店街が軒を並べ活気に満ちている。隣接しては、市民の台所としての「京都中央卸売市場」や先端産業の拠点としての「京都市リサーチパーク」等がある。京都駅西地区の開発に伴って、マンションも急増し、児童数も増加の一途をたどっている。

本校を含む七条中学校エリア4校では、小中一貫構想にもとづき、社会性や自己有用感等、豊かな心を育む共通の取組を行っている。とりわけ、自分も人も幸せにする日本一のあいさつの輪を広げる取組や、地域挙げての規範「七条中エリア 子どもの本気 大人の本気」が特色である。



わたしとあなたの「なりたい自分」共にめざそう かなえよう

～ 自信をもって 認め合って 補い合って ～

学校経営方針

あらゆることを「自分ごと」と捉え、「すすんで役に立とうとする」子を育てるために、「キャリア教育」の視点に立った学校づくりを総がかりで推進する。

めざす学校像

- ◆ 「ごみ」と「いじめ」のない学校
- ◆ 最善を尽くす学校

めざす子ども像

- ◆ よく考え、行動する子
- ◆ かかわり、つながる子

めざす教職員像

- ◆ 当事者意識
- ◆ 明るい笑顔
- ◆ 投資の発想

児童の実態

児童が授業に向かう姿勢としては、どの学年の児童もまじめに授業に取り組んではいるが、授業の中で、学習問題を解決するために、自らの考えを積極的に出し合い友だちと話し合ったり、笑顔で目を輝かせ夢中になって学習に向かったりすることが少ないと分析している。家庭学習においても、与えられた課題以外に内容を広げる・深めることに取り組んだり、今の自分に必要な内容を見極めて自ら課題を設定して取り組んだりする力については、まだまだ乏しいと感じられる。

本校では毎年クラス替えをし、子どもどうしの人間関係は毎年少しずつ広がっていく。しかしながら、狭い範囲でしか人間関係をつむごうとしない児童も少なくない。上級生が下級生をいたわったり見守ったり、下級生が上級生を慕ったり尊敬したり等の姿も乏しく、子どもどうしの「つながり」の薄さを感じられる。

本校児童は、素直で元気いっぱいな児童が多い。しかし、主体的に行動したり、自分で考えぬいて答えを導き出そうとしたりできているかという点、個人によって差はあるが、まだまだである。今あるものをさらに良くしようと行動に移すことのできる児童は少なく、自分で考えて行動する経験の少なさや自信のなさから、人からの指示を待つ児童が多い。また、ものごとを決める際に、自分で判断することをせずに安易に他の意見に流されてしまう傾向や、自分の考えをもちながらも周囲に気を遣ってはつきりと考えを言うことができない、失敗を恐れて行動に移すことができない等の傾向も見られる。

キャリア教育の視点に立った教育活動を通して、自分の意思に対して自信や責任をもつこと、自分の良さや自分の可能性に気付くこと、他者に関心をもち協働姿勢を示すこと等、人や社会とのかかわりの中で「なりたい自分」に向かう力を育てていきたい。

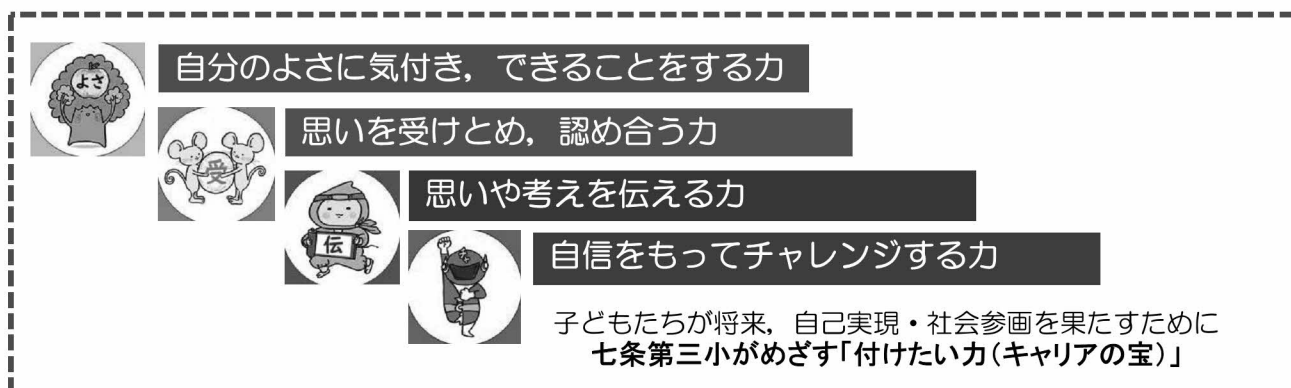
本校のグランドビジョン



キャリア教育の視点に立つ あらゆることを「自分ごと」と捉えさせるために

① 付けたい力(キャリアの宝)を分かりやすく示して学びを「自分ごと」に

本校として、児童に身に付けさせたい資質・能力は何か、時間をかけて教職員で話し合い、未来に通用する4つの付けたい力(キャリアの宝)にまとめた。これらは、特定の教科・領域にとどまるものではなく、汎用的な力としてさまざまな場面に生かされるものとして、教職員だけでなく、児童自身が意識できるよう、授業や行事において、「今日の学習はどんな力につながるか」を問うようにしている。直感的に認知でき、理解が広がっていくよう、本校教職員がデザイン化し、あらゆる場面での活用を進めている。



② 4つの標準装備で授業を「自分ごと」に

授業を行う本校教職員の心得として設定している。特に4つ目の「笑顔と喜び」は令和元年度に組み込んだもので、教師が教育活動を楽しむという原点を見失っては、真に児童に届く授業などできないという考えに基づく。

ある教員は、「自分が笑顔のときは、子どもたちの反応がちがう。笑顔と喜びの好循環が生まれる。」と言っていた。

4つの標準装備



1 学習意欲につながる「問い」



2 「自分ごと」にする「まとめ・ふりかえり」



3 ICTの活用



4 笑顔と喜び(教職員が教育活動を楽しむこと)

③ “七三版キャリアノート”で役割と成長を「自分ごと」に

特別活動を要としたキャリア教育実践のための効果的なツールとなる「キャリア・パスポート」が2020年4月よりすべての小・中・高で実施することになる。「キャリア・パスポート」は、小学校から高等学校を通じて、児童・生徒が自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、ふり返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につながぐものとされている。教職員にとっても、その記述をもとに対話的にかかわる（キャリア・カウンセリング）ことによって、児童・生徒の成長を促し、系統的な指導につなげていく有効な取組となる。

本校では、これに先立ち、平成30年度から“七三版キャリアノート”として、目標とふりかえりを蓄積し、自身の歩みを積み重ねていくことを始めた。令和元年度には、その内容・取り組み方を見直し、児童の資質・能力向上につながるよう工夫している。

④ キャリア教育年間計画を教科横断的に示し、カリキュラムを「自分ごと」に

本校では、どのようなプロセスで4つの付けたい力（キャリアの宝）を育むのかを、教職員だけでなく、児童・保護者とも共有するために、キャリア教育の年間計画（単元配列表）を作成している。児童は、“七三版キャリアノート”の取組に併せて、節目ごとにこの年間計画に基づいて、学びを確かめている。

キャリア教育の視点に立つ 進んで「人の役に立とうとする」子を育てるために

① 子ども相互がかかわり合う授業で自分の意見や行動が友だちの役に立っていることを実感

今年度は、研究主題を「まわりとつながり、自分につなげる楽しい学びの創造～付けたい力（キャリアの宝）をめざす授業づくり～」とし、山場のある授業づくりをめざしている。

2学期からは、協働学習（話し合い活動）の改善に向けて「知識構成型ジグソー法」の効果に着目している。研究教科である算数科を中心に、「問い」に対して3種類のエキスパート課題を用意する「知識構成型ジグソー法」を標準形としているが、まだまだ研究途上であり、「ジグソー法もどき」の授業も認め、児童の協働学習（話し合い活動）の姿が変わることを最優先して取組を進めている。また、エキスパート課題を2つにしたり、「1人では解決できない「問い」に向かう」「自分の考えをもつ」「異なる意見を組み合わせる」といった「知識構成型ジグソー法」の要素を取り入れた話し合い活動にしたりすることも可としている。

大事なことは、旧態然とした、停滞した協働学習（話し合い活動）の在り方を打破することであり、

指導者が協働の必然性を感じたときには「ジグソーの眼鏡で単元・本時を見る」（知識構成型ジグソー法、またはそれに類するものが効果的に取り入れられないか検討する）ことにしている。

同時に、児童のふりかえりが「楽しい」から「うれしい」に昇華する意味合いでも協働学習（話し合い活動）を重視している。他者と関わることで生まれる「うれしい」の感情をわたしたちは引き出した

② 異学年との交流・協働で自分が役に立っていることを実感

子どもどうしの人間関係が希薄化する中、本校でも意図した「たてわり」を取り入れるようにしている。児童会活動、学校行事等はもちろん、通常授業の中でも意図的に「たてわり」を実施し、その効果に期待しているところである。

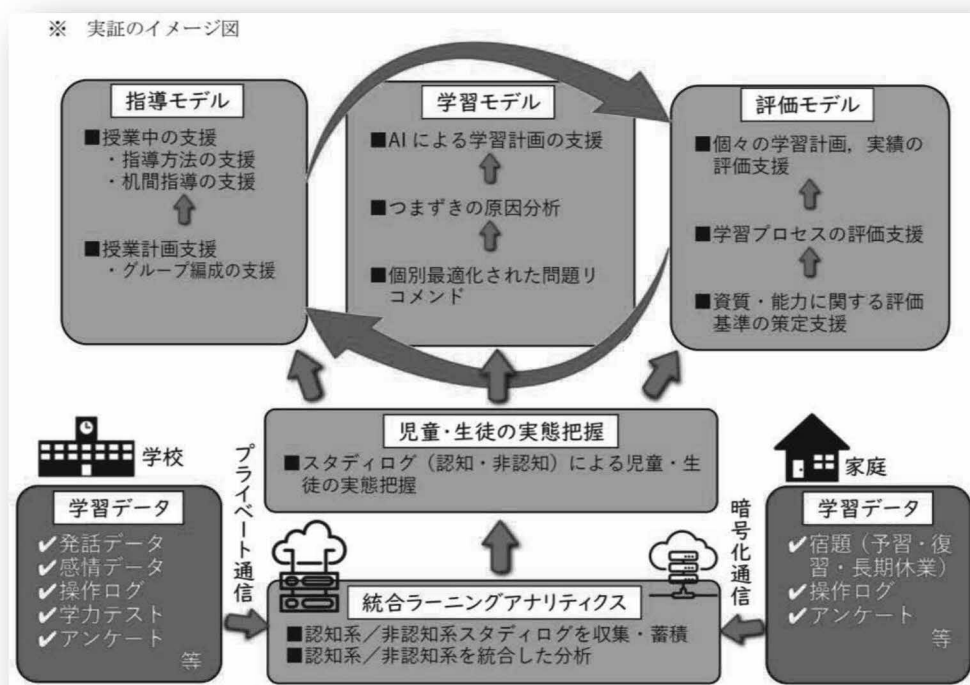


未来型教育の取組

本校が現在実証を進めている「未来型教育」は、令和元年9月に文部科学省よりプロジェクト採択を受けた「新時代の学びにおける先端技術導入実証研究事業（学校における先端技術の活用に関する実証事業）」によるものであり、平成30年10月より実施を開始した「未来型教育京都モデル実証事業（京都市次期教育モデル検討プロジェクト）」の内容を一部含むものとなっている。

本校では、新学習指導要領に示された「どのように学ぶか」（主体的・対話的で深い学び）と本実証の接点を探りながら、とりわけ授業改善に先端技術を活用することに重点を置いて取組を進めてきた。一斉指導でありながら教師主導ではない、子どもたちが嬉々として課題解決に向かう協働学習（話し合い活動）を軸とした授業づくりをめざして、1人1台のタブレット使用、ピンマイクによる音声収集、協働学習支援システムによるデータの解析・分析、デジタル教材配信システムの活用等に挑戦している。

実証推進にあたっては、京都市教育委員会学校指導課の指導助言を得ながら、日本電気株式会社（NEC）、京都大学緒方広明教授研究室と連携し、またSky株式会社から技術支援を受けている。



「ごみ」と「いじめ」のない学校

く環境を散らかすのが「ごみ」、人間関係を散らかすのが「いじめ」。両者には相関があります。その一掃に総力を挙げ、豊かな教育基盤をつくりましょう。>・・・これを人権教育の柱としている。校内美化活動と人権教育、生徒指導、総合育成支援教育等を連動させ、豊かな心の育成に取り組んでいる。

「いじめはしない させない 許さない」をテーマに年2回の参観授業を行う。薬物乱用防止授業も全学級で実施している。



校内美化活動

「割れ窓理論」を生じさせない

- ・ 毎日そうじ・毎日ごみ捨て
- ・ 自分のぞうきんで、月1回「本気ふきそうじ」
- ・ 学期末には大そうじ
- ・ 机の中やロッカーの中の整理整頓
- ・ ごみを出さない、ごみを見付けたら、自分が拾う
- ・ スリッパやくつは「ソロエル・ナラベル」
- ・ 使ったものはもと通り片付ける
- ・ 廊下すっきり

「本気ふきそうじ」では、日ごろ行き届かない場所も児童自身が見付けて、すすんで清掃に取り組んでいる。



人権教育

多様な価値観の理解

- ・ 喫緊の課題と不易の課題のバランスがとれた取組
- ・ 「こころの日」「こころの日参観」
- ・ 自己研鑽と教材研究
- ・ 広報、掲示の工夫



生徒指導

自己指導力の育成

- ・ 生徒指導の本質と三機能を念頭に置いた学級・学年経営
- ・ いじめ、問題行動の積極的認知・対応
- ・ 判断力を育むルールづくり

但し、「社会で許されないことと、学校で許されないことは同じ」



総合育成支援教育

個を集団から切り離さない

- ・ 個別の指導計画の機能化
- ・ 指導につながるケース会議
- ・ 子ども支援シートの活用



事務的な連絡は、もれなく確認できるよう、職員室内に電子掲示板を設置。その分、「子どものことをいっぱい話そう」と呼びかけている。

職員室内にカフェテーブルを配置し、日常的な立ち話（意味ある雑談）が起こるようにしている。



おわりに

キャリア教育の視点に立った学校づくりに取り組んで3年、徐々にその重要性を理解する教職員が増え、ボトムアップで取組を支える組織になりつつある。特別なことではなく、これまで取り組んできたこと、新たに取組もうとすることを「キャリアのライト」で照らしてみる——これからも挑戦の姿勢を忘れずに、全教職員一丸となって児童の学びと育ちに力を尽くしていきたい。